

接吻

2008(平成20)年5月9日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督＝万田邦敏／脚本＝万田珠実、万田邦敏／出演＝小池栄子／豊川悦司／仲村トオル／篠田三郎（ファントム・フィルム配給／2006年日本映画／108分）

……テレビで観た殺人犯の意味シな笑顔に孤独なOLが恋を！ それは一体なぜ？ 獄中結婚に始まり、国選弁護人を巻き込んだ三つ巴の意外な展開はスリル満点！ そして、最後に待つ「仕切りなし面会」における驚愕のクライマックスとは……？ 意味シなタイトルを熟考し、かつキム・ギドク監督の『プレス』（07年）と対比させながら観れば、一層興味深いが……。

映画づくりは、企画、脚本から！

シネコン方式による大量スクリーン、大量宣伝とTVドラマの劇場版、原作本の映画化が目立っている邦画界だが、そんな中でもやはりオリジナルでこだわりをもった企画、脚本による映画づくりはなお健在！ この映画を観れば、それがよくわかる。

プレスシートの「プロダクションノート」には、万田珠実の『『Notebook』から『接吻』へ』という解説がある。彼女はこの映画の監督であり共同で脚本を書いた万田邦敏の奥さんだが、そこに綴られているこの映画完成に至るまでの「告白」は非常に興味深い。それを読めば、プロデューサーから「死刑囚の獄中結婚もので何か書けないか」との提案を受けた彼女は、まず「自分には無理だ」と反応したものの、『『ピアニスト』のイザベル・ユペールを思い出した』ことによって「主人公がいやな人間でもいいんだ」という考えが思い浮かび、「このアプローチなら書ける、書いてみたいと思った」というプロセスがよくわかる。

タイトルの仮題は『Notebook』だったこと、それがいつの間にか『接吻』に変わったこと、また映画のクライマックスで現実には到底考えられない接吻のシーンを取り入れることについて万田邦敏監督を交じえたさまざまな検討があったことなどは、同じくプレスシートにある万田邦敏と万田珠実の「インタビュー」を読めば、よくわ

かる。この2つを読めば、やっぱり「映画づくりは企画、脚本から！」とあらためて実感できるはずだ。

私は『プレス』との共通点をみたが……

私が尊敬してやまない、韓国の天才監督キム・ギドクの14作目が『プレス』(07年)。これは、台湾の珠玉張^{チャン・チェン}震演ずる死刑囚チャン・ジンが自殺を図ったことをたまたまテレビニュースを観て知った、夫の不倫に悩むパク・チア演ずる主婦ヨンがなぜか彼に惹かれ、「昔の恋人」と偽って面会に赴くことから生まれる強烈なストーリー。『プレス』でヨンがチャンにプレゼントするのは春夏秋冬という季節だったが、『接吻』で遠藤京子(小池栄子)が第1審で死刑判決の言渡しを受けた坂口秋生(豊川悦司)に対してプレゼントするのは、何と獄中結婚。

テレビニュースを観てチャンに惹かれたヨンもヘンな女だったが、一軒家に侵入し親子3人を殺害した事件で逮捕され、ニヤリと笑う坂口をみてそれに惹かれたという京子もヘンな女。『接吻』は『プレス』とこんな共通点をもっているが、そう感じるのはひょっとして私だけ? 脚本を書いた万田邦敏+珠実はそんなことは意識していないはず……?

やはり豊川悦司にはこんな役が!

トヨエツこと豊川悦司は器用だから、どんな役でも演じることができる得がたい俳優。黒澤明作品をリメイクした『椿三十郎』(07年)の室戸半兵衛役もそれなりの演技だったが、やはり時代劇よりこんなシリアスで奇妙な役柄(?)がトヨエツにはピッタリ。とりわけ、前半のセリフゼロの役柄が、キム・ギドク作品ばりでグッド。

映画の冒頭、カメラは住宅街に向けて階段を上っていく坂口の後ろ姿を追うが、そのズボン右後ろのポケットに入っているものは……? これがヤクザ映画の鶴田浩二や高倉健あるいは富司純子なら、着流しで手に持った日本刀が絵になるはず。また、ちょっと近代的なギャング映画なら、日本刀がピストルに変わるだけでオーケーだが、さて彼の右後ろポケットに入っているものは……?

それを、この映画の冒頭を観ただけで正解できれば、大したもの……?

🎬 小池栄子は主演女優賞狙い……？

今なおスケベ心をもって週刊誌の目次や刺激的なタイトルのヌード写真に目が行く世の男性諸氏は、小池栄子の名前と顔を比較的良好に知っているのでは……？ つまり、グラビアアイドル的な存在としての彼女が男性の目に目立っているわけだ。

そんな男の1人である私の頭の中には、異様に大きい目(?)といかにも女を感じさせる大きな胸が、小池栄子という覚えやすい名前と共にインプットされていた。しかし、テレビドラマもバラエティー番組も観ない私の目に、彼女の姿が登場することはなかったが、ある日偶然観た『日経スペシャル カンブリア宮殿～村上龍の経済トークライブ～』で村上龍と共にゲストに質問している彼女の姿。「あれ、お飾りではないんだ」と知ってビックリ！

そんな彼女をこの映画の主演に抜擢したのは万田邦敏監督だが、それは「どうも私には“いかにも”な配役を避け、真逆を好む傾向がありまして」という珠美夫人の推薦によるものらしい。家族とも友人とも疎遠で、社会から隔離された心で生きている28歳の孤独なOLという設定には、「なぜあんなベツピンが……？」と違和感を感じるが、最初のそれが小池栄子抜擢の狙い……？ そんな孤独な京子が、なぜ逮捕される瞬間の坂口の笑い顔を見たとき彼に恋したのか？ それが、キム・ギドク監督の『プレス』と同じ、この映画前半最大のヤマ！ そこから始まった、坂口を軸とした彼女の怒濤の人生は……？

映画全編にわたって何とも異色な主人公を見事に演じきった彼女は、ひょっとして今年の主演女優賞候補の1人に……？

🎬 弁護士の生きザマあれこれ……？

2009年5月21日からの裁判員制度の施行を控えて、アピール能力をもった刑事弁護士の養成が焦眉の課題とされているが、今のような付け焼刃的な研修をいくらやっても到底ムリ……？ 根本から裁判員制度に対応できる弁護士を10年計画、20年計画で養成しなくちゃ……。

他方、弁護士の生きザマをめぐる現実のドラマは面白い。その第1は、茶髪弁護士から大阪府知事へ転身した橋下徹氏の例。現在最大の注目点は、08年4月22日に広島高裁が光市母子殺害事件の元少年に対して言い渡した死刑判決をめぐって、非難が集



中している安田好弘団長以下の弁護団の生きザマ。そんな中、08年4月には、同弁護団を「解任」された広島弁護士会の今枝仁弁護士による、光市母子殺害事件差戻控訴審の内幕を描いた『なぜ僕は「悪魔」と呼ばれた少年を助けようとしたのか』が出版されるに及び、弁護士の生きザマについての現実のドラマはあれこれいっぱいだが……。

長谷川弁護士の生きザマは……？

そんな目でこの映画を観れば、坂口の国選弁護人として登場する長谷川弁護士（仲村トオル）の生きザマが興味深い。坂口の事件を受任した彼が面会に赴いても、依頼人たる坂口が全然口をきいてくれないのだから、弁護士はホントに大変。しかも、1審で言い渡された死刑判決に控訴すべきだという彼の意見にも全く耳を傾けてくれないのだから、なおさら大変。もっともそれは、長谷川が真面目な弁護士だからであっ

て、最近やたら多い「依頼者が〇〇と言っているから」タイプの弁護士であれば、「あっそう……」と安易に坂口の方針に従えばいいだけだから至極簡単かも……？ したがって、この映画の終盤に展開されるあっと驚くストーリーは、あくまで長谷川弁護士が職務に熱心で真面目な弁護士だからこそ成り立つものだと肝に銘じてもらいたい。

毎日のように坂口と面会し、そのうえ京子の動向までフォローする長谷川弁護士の生きざまをみていると、これはある意味刑事弁護士の鑑。彼にとって坂口のような被告人を扱うのは大変だろうが、それも弁護士として大成長するための一里塚。しかし、弁護士として事件に関連する女性との関係には十二分に注意しなければ……？

仕切りなし面会の可否は……？

映画の中盤は、1審の死刑判決に対し2週間の控訴期間内に控訴すべきと主張する長谷川弁護士と、それに何の反応も示さない坂口との「対決」面会と、坂口に獄中結婚を提案する京子との「癒し」面会という2つの流れがメイン。この面会は両者とも仕切りガラスを隔てたものだから、小さな穴のあいた中央部から声は聞こえるが、手を触れ合うことなどは到底できないもの。これが私も弁護士として何十回も経験している日本の被告人との面会事情だ。

そんな中、京子が長谷川弁護士にお願いしたのは「1度でいいから仕切りのない状態で坂口と面会したい」ということ。「そんなことはムリ」と私ならばねつけてしまうところだが、長谷川弁護士は「所長の許可をとれば可能だから頼んでみる」と返事したからビックリ。なるほど、そんな方法があるのかと思って調べてみると、たしかに仕切りなしの部屋で面会できるようだが、どんな手続でそれが可能となるのかは現実に関い合わせてみなければわからない。ちなみに、ネット情報によると、アメリカには「夫婦面会」という制度があり、ベッドのある個室で会えるらしいが、それってホント……？ また、キム・ギドク監督の『プレス』では、看守が見守る中、手錠のまま主人公チャンが面会に来たヨンと床の上でむさぼるようなセックス行為に及んでいたが、これは日本では絶対にムリ。

女の気持は女でなければ……

前半、中盤と淡々と進んでいた物語は、坂口が長谷川弁護士の勧めに応じて（？）

控訴を承諾したことを契機として突然潮目が変わってくる。坂口との獄中結婚を果たし、毎日の面会時間の中で2人だけの幸せを満喫していた京子は、坂口が控訴に同意したことを知って激怒。「なぜ、私に相談もなく……」と、はじめて彼女の心の叫びがセリフとなって次々と！

そもそもあんなにベッピンなのに、なぜ京子が家族からも会社からも社会からも疎外されているの？ と私などはついそう思うってしまうのだが、そんな女の気持はやはり女でなければわからないとばかりに、万田珠実の脚本は以降かなり暴走気味に走り始めるからご注目！ 「俺と君は違う。俺は人を殺したんだ！」と叫ぶ坂口に対して、「違わない！」と断固言い放つ京子の確信は一体ナゼ……？ それはどこから生まれてくるの……？ そして今日、仕切りなし面会に臨む京子は、その胸の中にどんな決意を……？

ついに仕切りなし面会の日が……

京子の頼みを受けた長谷川弁護士の尽力の結果実現したのが、坂口の誕生日における仕切りなし面会。弁護士の同席は必要ないはずだが、2人の関係に深く入り込んでいる長谷川弁護士はその面会にも同席する様子。当日京子が持参したのはバースデーケーキだが、その前にお礼だと言って長谷川弁護士に渡した品物がちょっと気になる場所……？

厳重なチェックの下に、そしてもちろん刑務官(?)立会いの下に、テーブルを挟んで仕切りなし面会が実現したが、さてそれはいかなる展開に……？

意味シンなタイトルと驚愕のラストシーンに注目！

いつの頃から性行為のことを軽くエッチと言い始めたのか知らないが、「接吻」などという時代があった言葉は今や完全な死語。実際の会話で使われることはまずないはずだ。しかるに、そんな言葉がこの映画のタイトルとされたのはナゼ……？ 誰しもそんな疑問を持つはずだから、その疑問は映画終了まできちんと持ち続けてほしいもの。

他方、映画の善し悪しの半分はラストシーンで決まるから、そこにクライマックスをもってくるのは映画づくりの常套手段。そしてもちろん、万田珠実と万田邦敏2人が書いた脚本におけるクライマックスは、ラストに設定された仕切りなし面会のシー

ン。私が注目しながら観ている限り、刑務官が立ち会っているものの、バッグの中の検査も形式的だし、ケーキの毒見をするわけではないから、ひょっとしてケーキの中に毒が入っていれば……？ さらに、ケーキの中に小型の拳銃を隠し、これを取り出した京子が刑務官を次々と射殺したら、などとバカげた妄想まで……？

それは冗談だが、バースデーケーキに立てたローソクに火をつけ、ハッピーバースデーの曲を歌いながらテーブルの周りを歩く京子が次に見せる行動は……？ この驚愕のラストシーンは、是非あなたの目でしっかりと！

議論の素材に最適！

映画は所詮人間のつくりものだから、これが正解という自信満々のつくり方もあれば、観客に自由な解釈を委ねるといふ若干ずるいつくり方(?)もある。そして一般的には、女性脚本家は前者が多く、男性脚本家には後者が多い……？ かどうかは知らないが、さて夫婦で共同脚本を書いたこの映画のクライマックスは、これが正解というものはなく、多様な解釈が可能。

この映画は、M・ナイト・シャマラン監督の『シックス・センス』(99年)や、同じ日に続けて観たガイ・リッチー監督の『リボルバー』(05年)と同じように、「物語の結末は絶対にしゃべらないで下さい」と注文をつけなければならないタイプの作品。したがって、これ以上ここには書けないが、3人で観れば3通りの、5人で観れば5通りの解釈が可能だから、議論の素材に最適。

私は弁護士として、長谷川弁護士の対応に注目したが、それはきっと少数派……。多くの人が設定する論点はなぜ○○？ そしてなぜ△△？ だろう。さて、あなたが設定する論点と、あなたの解釈は……？

2008(平成20)年5月10日記